「道内演劇界の羅針盤」

斎藤さん悼む声相次ぐ

最後の舞台となった「カフカ経由　シスカ行き」を終え、出演者と記念撮影する斎藤歩さん（前列右）＝2024年12月1日、十勝管内幕別町

11日に死去した演劇人、斎藤歩さんに道内外から悼む声が上がった。（26面参照）

「北海道演劇界の行く先を示す羅針盤のような存在だった」。札幌で小劇場を主宰し、1980年代半ばから40年近く斎藤さんの芝居を見てきた飯塚優子さん(76)は唯一無二の存在をこう表現。

「年齢を重ねても若い頃のハートを忘れない、チャーミングな人だった」と肩を落とした。

北大時代の斎藤さんの舞台でファンになったという札幌の芸能事務所クリエイティブオフィスキュー社長の伊藤亜由美さん(60)は、自身も役者をしていた20代のころ共演し、その後も親交が深く5月には自宅を訪ねた。「食べられない状況なのにパソコンで夏の舞台の脚本を直していた。本当は板（舞台）の上で死にたかっただろう」と思いをはせた。

斎藤さんと共演し、斎藤さんが東京で活躍するきっかけともなった名優・柄本明さん(76)は事務所を通じ「北海道の演劇の巨人でした。早すぎます」とした。

北海道演劇財団顧問で「ジョブキタ北八劇場」専務理事の平田修二さん(78)は同財団設立準備中の1990年ごろ、まだ20代だった斎藤さんに、TPS（シアタープロジェクトさっぽろ、現・札幌座）の契約アーティスト就任を打診した。長く共に歩み、同劇場では斎藤さんの代表作「西線11条のアリア」や「民衆の敵」も上演。「病を押して盛り上げてくれた。もっとこの劇場で活躍してほしかった」と悼んだ。

最後の舞台出演は昨年12月、人形劇師の沢則行さん(小樽出身、チェコ在住)と共演した「カフカ経由　シスカ行き」十勝管内幕別町公演だった。8月の札幌座作品への出演はかなわなかった。

（石井昇、服部貴子）

（C）北海道新聞社　無断転載、複製および頒布は禁止します。